

中山道 69 次ウォーキング 16 日目

東赤坂駅-赤坂-6.9Km-垂井-5.2Km-関ヶ原-4.2Km-今須-3.3Km-柏原-5.4Km-醒井

9月27日、始発電車に乗る為に5:30に家を出ると、日の出前ではあるものの既に明るい西空で大きく輝くスーパームーン、ラッキーな気分となる。 京都・米原・大垣で乗り換え、前回到達地点の養老鉄道東赤坂駅に9時到着。本日の予想最高温度は28度で曇り時々晴れ、通勤の人も全員長袖、最初は少し寒かったが歩き始めるとすぐに暖くなり、長袖シャツを脱ぎ。半袖Tシャツとなる。

赤坂宿 56 番目

最初に目にはいつてきたのは「火の見櫓」、今時珍しいと思ったらなんと「常夜灯」、付近には赤坂港の地名表示があり、昔は揖斐川と杭瀬川が合流した大河の港で、明治になっても近くの鉾山の石灰を運ぶ舟で賑わったとのこと、常夜灯と言うよりは灯台の役目か。 但し、現在では小川のほitori。本陣・脇本陣は残っておらず、説明板のみ。

本陣跡は整地されていて公園のようになっており、和宮宿泊の記念碑と「所郁太郎」なる武士の銅像がある。 所郁太郎と馴染みのない名前、当地出身の「幕末の憂国の志士」で町医だったが、桂小五郎・高杉晋作等と親交があり、長州藩の医院総督を勤め、維新前年に病没。 瀕死の重症の井上聞多(馨)を手術し畳針で縫って一命を救った話が戦前の教科書に書かれていた。 更に出生の地と墓があり、当地で唯一人の幕末の志士だったのかも。 街道沿いに旧家がチラホラあるが、ふと覗いた横丁には旧家の土蔵や塀が連なり、そちらの方が宿場町の雰囲気が残っていた。

常夜灯



所郁太郎像



旧家の連なる横丁



大垣市景観遺産



また、主要な遺跡には、世界遺産ブームの影響か、「大垣市景観遺産」のレリーフが置かれている。

立派な旧家と倒れそうな旧家

白い漆喰と木の壁の綺麗な旧家があり、比較的最近の建築かと思ったら、赤坂宿最古の木造建築の一つで十八世紀半ば建造の旧清水家、米屋を営み、市に寄贈されたもの。

その近くにあったのが現在も人が住んでいる旧家で、屋根は曲がり、台風でもきたら倒壊しそう。

旧清水家



屋根の曲がった旧家



お茶屋家屋敷跡

家康は関ヶ原で勝利後に上洛の為の自軍専用の休憩宿泊所を中山道の 16Km 毎に作らせた

そうで、その一つ

を明治維新後に払い下げ、庭園としたものがお茶屋家

屋敷、風情のある

入口を入ると竹林や庭木・池が

見事だった。

お茶屋家屋敷跡の入口



お茶屋家屋敷跡の庭園



昼飯と青墓

道路標識に「昼飯大塚古墳」と書かれており、「ひるめしおおつかこふん」と読むのかな、

と心の中で笑いながら歩いていたら、「ひるい病院」があり、「昼飯」は「ひるい」と読む

と気がついた。更に歩くと昼飯町の由来が書いてあった。



むかし、善光寺如来という仏像が、大阪の海から拾いあげられ、長野の善光寺へ納められる事になり、その仏像をはこぶ人々がこの付近で昼飯（ひるめし）をとり、それから、この付近を昼飯（ひるめし）と言うようになりました。その名が下品であると言うので、その後、飯の字を「いい」と音読みにして「ひるいい」と呼ばれるようになりましたが、「いい」は言いにくいので、一字を略して「ひるい」と呼ばれるようになりました。

更に歩いていくと「青墓小学校」があり、そのあたりは「青墓町」。この付近の人は、「出身はどこですか?」と聞かれたら「青墓です」と答えることになるが、何か言いづらくて口ごもってしまうだろうな。聞いた方も「えーっ」と思うだろうし。

青墓の語源を調べたが不明、但し古代から不破関の隣にある宿駅として知られ、史跡の里との看板もあり、その内の二つを紹介。

照手姫と義経

その青墓町に「照手姫の水汲み井戸」と書かれた標識があり、姫と書かれていたので早速寄り道。そこには蓋をした井戸があり、その由来を書いた

照手姫の水汲み井戸



小篠竹の塚



説明板があった。中山道に戻ると直ぐに小篠竹の塚があり、そこは照手姫の墓と書かれている。

常陸の国の郡代、横山将監の娘・照手姫は、行儀見習に行った先の小栗判官と恋に落ちました。将監は二人の恋を妨げ、判官を殺しました。照手姫は家を飛び出しましたが悪者にさらわれ青墓の長者に売られました。長者は照手姫に客をとらせようとしますが、姫は観音様の御利益でこの難を切り抜けます。やがて小栗判官は熊野の霊泉によって蘇り、安八郡安八町にある結大明神の前的大悲閣観音堂で、姫とめぐりあいます。

その小篠竹の塚の近くにあるのが芦竹庵でこちらは義経伝説。

芦竹庵

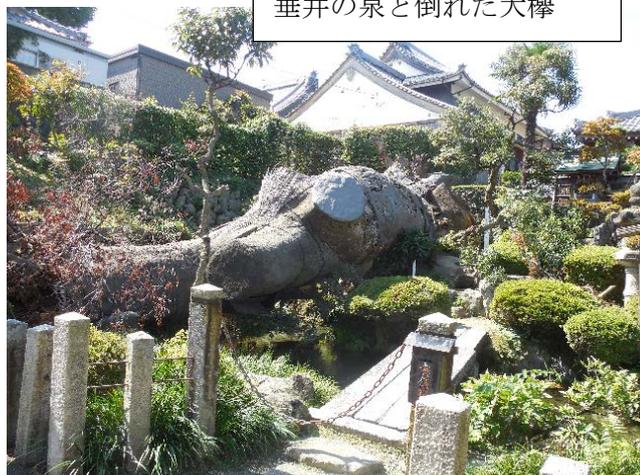


牛若丸は、鞍馬山で修行を終え、金亮吉次をお供に奥州へ落ちのびる途中、青墓の円願寺で休み、なくなった父や兄の霊を供養し、源氏が再び栄えるように祈りました。その時、江州から杖にしてきた芦の杖を地面につきさし、「挿しおくも、形見となれや後の世に 源氏栄えば 芦竹となれ」の歌を詠み、東国へ出発しました。その願いが仏道に通じたのか、杖にしてきた芦が芽をふき根をはり、見事な枝に竹の葉が茂りました。しかし根や幹はもとのままの芦でした。それで、このめずらしい竹を「芦竹」と呼び、この寺を芦竹庵と呼ぶようになりました。

垂井宿 57 番目

垂井宿に到着、南宮大社に向かう参道沿いにある、地名の語源の「垂井の泉」に寄り道。その泉の横に巨大な木が倒れている。この木は樹齢約 800 年の岐阜県指定天然記念物「垂井の大ケヤキ」、今年 9 月 11 日に台風 18 号の影響で根元から倒れたもので、町のシンボルとして親しまれ、高さ約 20m、目の高さの幹の直径は約 8.2m。

垂井の泉と倒れた大樺



この櫓の根元から湧き出る伏流水は、垂井の泉として街道を行き交う旅人の喉を潤した。透明な水なので泳いでいる鯉とその影がハッキリと見える。泉のそばにある芭蕉の句碑「葱白く洗ひたてたる寒さかな」は倒れた櫓で殆ど見えない。垂井宿には、本陣・脇本陣は残っていないが、旅籠亀丸屋は現在も旅館として営業している。

垂井の泉の鯉



今も営業している旅籠亀丸屋



早い朝食だったので 11 時頃には空腹、食べる所を探すものの一軒もなく、30 分程歩いて「昼食」の看板のあるのを見つけて入店。カウンターと小さな小上がりのある正真証明の居酒屋、直ぐにできるものはチャーハンか焼きそばとのことでチャーハンを注文、650 円也。味はまあまあ、ビールの中ジョッキで冷たいお茶が出てきて直ぐに飲み干してしまった。ガラガラ声のオバさんによると、中山道を歩く客の飛び込みが多いそうで、関ヶ原まで食事を出す店はないとのこと。この店に気がついて良かった。

棟木の飾り

垂井から関ヶ原まで 1 時間程、その間の民家の並ぶ旧街道を歩いていて多くの民家の特徴に気がついた。屋根の側面に小さな出窓の様なものがあり、色んなデザインがなされている。？ が頭の中で段々大きくなり、我慢できずに、家の修理をしていた人に訪ねたところ「家の棟木を突き出して、その切り口を飾ったもの、この付近は材木が豊富で、棟木も太く長いものを使用する」とのことだった。また、このあたりは名だたる豪雪地帯、どの屋根も雪止めが沢山ついていた。

棟木の飾り



関ヶ原宿 58 番目

関ヶ原に到着、まず関ヶ原の松並木があり、その途中に「山ノ内一豊の陣跡」、松並木を出たところに「徳川家康最初の陣跡」の桃配山(ももくばりやま)がある。関ヶ原は小山がいくつもある盆地であり、その小山を陣地として平野部分で徳川家康勢と石田三成勢が天下分け目の戦いをしたのは1600年。その千年程前の672年、天智天皇亡きあと、天皇の弟の大海人皇子と天智天皇の子の大友皇子との間で皇位継承を争い、古代史上最大の戦いである壬申の乱となり、その時も関ヶ原は戦場。壬申の乱の時に大海人皇子が桃配山に陣を構え、兵士に山桃を配って勝利し、家康もその故事に習ってこの山に最初の陣を構えた。最初の陣地がある以上、最後の陣地もある。

関ヶ原の松並木



桃配山



「XXの陣跡」、「この先xxメートル、XXの戦跡」、「XXの墓」等の案内板が沢山あり、古戦場ツアーのコースもあるが、先を急ぐ身なので中山道歩きに徹することにする。また、東の首塚、西の首塚、黒血川(壬申の乱の時に両軍の兵士の血で川が黒くなった)など地名もおどろおどろしい。

兜掛石と沓脱石

兜掛石



壬申の乱の時に大海人皇子が兜を掛けたと云う兜掛石と沓を脱いだ時に足をかけた沓脱石がある。

沓脱石



兜掛石は社の中に鎮座しているが、沓脱石は畑の横に放り出されているのは何故?

大海人皇子は勝者として天武天皇となったので言い伝えが残され、敗者の大友皇子には言い伝えは少ないのではと考えてしまう。因みに「天皇」の称号を使うのは天武天皇から、それまでは「大王」だった。

不破の関

ここはかつての不破の関であり、関ヶ原の地名もそこかきている。 ネットで調べると、関所は大化の改新(646年)に制度化され、東海道の鈴鹿関、東山道の不破関、北陸道の愛発関(あらちのせき-福井県敦賀市)が畿内を防御するために特に重視されて三関と言われた。平安時代中期以後は、愛発関に代わり、逢坂関が三関になった。



不破の関所

秋風や
藪も阜も
不破の関
芭蕉



今は関所の門が残っており、その裏側は庭園になっていて芭蕉と廬元坊(美濃の俳人)の句碑があった。

名月や
山も冨に
起とをし
廬元坊



常盤御前の墓と常磐地藏

関ヶ原宿と次の今須宿の中間の山中村に義経の母、常磐御前と侍女の墓があり、芭蕉の句碑がある。 墓の横に休憩所があったので一休み、お八つを食べる。

常磐御前と侍女の五輪塔



都の美女 1,000 人が集められその中で、1 番の美女の常磐御前は源義朝の愛妾となり、今若丸・乙若丸・牛若丸(源義経)の3児に恵まれました。義朝が平治の乱で敗れ、源氏はちりぢりになりました。 成長した牛若丸が東国へ走ったと聞いた常磐御前は、乳母の千種とともに牛若丸の後を追ってこの地にやってきました。ところが、ここで土賊に襲われ命を落としてしまいます。それを哀れんだ里人がここに葬り塚を築いたのでそうです

義朝の
心に似たり
秋の風
芭蕉



義経記か何かで読んだ記憶では、常磐御前は清盛の妾となったあとに公家と夫婦になり子供が生まれ、そこに牛若丸が会いに行くくだりがあった。 時系列としては奥州に行くのはその後となり、小さい子供のいる常磐御前が牛若丸を追うのかと疑問はあるが、義経には数多くの伝説があるのでこれもその一つ。

常磐御前の近くに
あったのが
常磐地蔵。
右の文を読んで
いて、「講談師
見てきたよう
なうそを言
い」を思
い出した。
常磐地蔵は古
くて目鼻も分
からないが、
その近くに
あった野仏
は表情が可愛
らしい。

常磐地蔵

平安末期、此処山中村で起きた常磐御前の不幸な出来事は、涙なしには語れない。常磐は、「義経がそのうちききとこの道を通って都に上る筈、その折には是非道端から見守ってやりたい。」と、宿の主人に形見の品を手渡し息を引き取った。時に常磐四十三歳。主人は常磐の念願が叶うよう街道脇に塚を築き、手厚く葬ったのである。「右手下約三〇〇メートル先にあり」

其の後哀れに思った村人は、無念の悲しみを伝える常磐地蔵を塚近くのこの場所に安置し、末永く供養することを誓い合った。

案の定寿永二年（一一八三）義経上洛のため、武万餘騎を率いて、当地若宮八幡神社に到着し、西海合戦勝利を祈願。合わせて母の塚及び地蔵前では、しばしひざまずき、草葉の陰から見守る常磐の冥福を祈ったという。

関ヶ原町

常磐地蔵



野仏



今須峠
次の宿場との間には今須峠、と言っても坂程度。人にも車にも会わなかったその坂道で、出迎えてくれたのは群舞する赤トンボとカマキリ君と毛虫君。



今須峠の
カマキリ君
と毛虫君



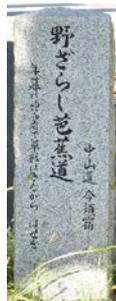
問屋場跡の旧家

今須宿 59 番目
今須宿には本陣・脇本陣は残っておらず、旧家は問屋場跡の一軒のみの小さな宿場。宿場のはずれに「野ざらし 芭蕉道」「奥の細道 芭蕉道」と書かれた石碑と句碑がある。



芭蕉が野ざらし紀行の帰りにこの地で詠んだ。

年暮れぬ
笠着て草履
履きながら
芭蕉



正月も
美濃と近江や
閏月
芭蕉



寝物語の里



国境の溝

寝物語と聞くと色っぽい話を想像してしまうが、今須宿の外れにある集落の溝は美濃と近江の国境で、その溝を挟んで両側に旅籠があり、壁越しに寝ながら他国の話を聞けるので寝物語の里と呼ばれることになった。美濃と近江の国境は、現在では岐阜県と滋賀県の県境。

また、義朝を追った常盤御前が隣の宿の話し声から家来の江田行義と気付いた所」とも「静御前が江田源蔵と巡りあった所」とも伝えられている。

大和郡山領と書かれた道標



大和郡山領の柏原

中山道の標識があり、そこに「江戸後期大和郡山領 柏原宿」と書かれていて、奈良住民としてこんなところに大和郡山領と興味を覚え、ネットで調べた

「柏原宿の地は交通の要衝でもあった為、古くは豊臣秀吉の蔵入地、その後は徳川幕府の直轄地であったが、享保9年には大和郡山藩領となり明治に至った」。面白いエピソードは無かったが、大和郡山藩は近江や河内にも領地を持っていたことがわかった。因みに江戸後期の大和郡山の藩主は柳沢家。

柏原の旧家が続く町並み

柏原(かしわばら)宿 60番目

本陣や脇本陣は無いが、旧家が何軒か軒を連ねている。右の写真の旧家の看板には「伊吹堂」と書かれており、「もぐさ」で有名だとか。遠い昔、祖母が背中に煙を上げるもぐさをのせ、「やいと」をしている情景を思い出した。あの頃の祖母は今の私より若い。



醒ヶ井(さめがい)宿 61 番目



居醒めの水

湧水が名水として有名なところ。まずは醒ヶ井の語源となった居醒めの水、平成の名水百選の一つだそうで、日本武尊が熱病に倒れた時、体毒を洗い流した霊水とも伝えられ、高熱から醒めたので居醒めの名となった。その泉に蟹石と腰掛け石、鞍懸石がある。蟹石は確かに蟹の甲羅に似ている。腰掛け石、鞍懸石は日本武尊が腰をかけたことと鞍を駆けたとの伝承によるが、石は草で判然としない。

蟹石



清流に回る水車

この泉から流れ出た水が街道沿いに流れる清流の地藏川で、宿場全体が綺麗に見える、小さな水車が回っていて嬉しくなる。

十王水と西行水

その清流に注ぐ次の泉が十王水、天台宗僧浄蔵貴所が開いたといわれる名水で、初めは浄蔵水と呼ばれていたが、近くに十王堂があったことから十王水となった。ここの茶店に立ち寄った西行法師が飲み残した茶の泡を、茶店の娘が飲んだところ、不思議にも懐妊。

十王水



男子を出産した。帰路にこの話を聞いた西行は「もし我が子なら元の泡へ帰れ」と念ずると、その子はたちまち消えて、もとの泡になったという不思議な伝説がある。この泉のまわりには赤いよだれかけをつけた小さい地藏が幾つも置かれていた。



西行水

薄暗くなってきたので切り上げることにし、JR 醒ヶ井駅に 5 時半到着、電車に乗り、京都経由で帰途、本日は 5.2 万歩

マンホールの蓋

赤坂宿(大垣市)の真ん中は市章。垂井宿は楽しいデザインで鯉のぼりと桜並木、周辺は町花の椿。関ヶ原宿はウメとスギと兜、中央は町章。

赤坂宿(大垣市)



垂井宿(垂井町)



関ヶ原宿



今須宿は見当たらず。柏原宿はマガモとゲンジボタル。醒ヶ井宿は旧米原町章の中にサツキ、イチヨウ。赤坂宿で中部電力のマンホール、NTTは沢山あるが電力会社は珍しい。

柏原宿(米原市、旧山東町)



醒ヶ井宿(米原市、旧米原町)



中部電力



16日目

